

# 日本の近世における疾病の歴史地理学的研究

社 会 科 研 究 室 堀 口 友 一

(昭和46年10月30日受理)

わが国における疾病の歴史的研究については、富士川遊著の日本疾病史および日本医学史があり、日本学士院編日本医学史に藤井尚久稿の本邦疾病史がある。本稿においては日本の近世における疾病について、歴史地理的な立場より考察を試みる。

奈良・平安の古代における疾病は、大陸文化伝来の影響によって大陸より新たな疾病が伝わった。これらの疾病の流行については古代文献に比較的明らかにされ、その治療は唐医方と祈禱に依存していた。鎌倉・室町・安土・桃山等の中世においては和名の疾病が多くあらわれ、流行の記録は古代に比してきわめて少なく、治療にあたっては後半に金元医方の西洋文化伝来の影響がみられた。

江戸時代には中世に比して疾病流行の状況が文献に記述され、蘭学の発達によって西洋医学がとり入れられたが、しかし病因については曖昧であったことがこの時代の特色である。

## I 伝 染 病 の 流 行

### 1. 腸管伝染病

赤痢 赤痢の流行についてはすでに奈良時代に痢および赤白痢云々と三代実録に記されている。江戸時代には寛永年間の病論俗解集に痢病をシブリハラと註し、延宝9年の医学初心抄、貞享年間の病名彙解にも痢病をシブリハラと記してある。そのほか流行記録には痢疾流行、疫痢流行等があげられ、貞享元年の増補師語録には疫痢を俗語腹ヤク病と記している。また俗にはアカハラともよばれていた。西洋医学の伝来してからはじめてこの疾病を扱ったのは、寛政年間の宇田川玄随による内科選要で、蘭名ペインレイキボイクロブを痛痢と訳しており、またビルマ名デイセンテリアをあげている。現在用いられている赤痢名 *Dysentery* がわが国にあらわれたのはこれが初めてである。宇田川玄随は“腐敗汚穢ノ毒ノ腸中ヲ刺戟スルニ因ルトナシ、而シテソノ病毒ハ種々ニシテ、疫熱、腐敗膿液、黒膿液等ヲ以テ主ナルモノ”としている。小森桃塙は文政9年の病因精義の書に“痢病ノ近因ハ酷厲侵蝕性ノ悪液”とし、遠因については“鬱滯セル湿蒸気、一切ノ汚穢気、時行伝染病悪気”をあげ

ている。扶氏経験遺訓は痢病の近因、遠因について大腸の抵抗過激、異常刺激、感動過敏等いずれも病理的で抽象的な取り扱いをしている。山川揚庵は安政年間の熱病叢原において“痢熱、新生之毒、因レ喫<sub>二</sub>不鮮之物<sub>一</sub>、而醸焉、其性熱酷厲、其質至微重濁而生活、云々と記している。

江戸時代の文献には赤痢、疫痢、痢病の区別が明らかでなく、流行の記録についても同様である。江戸時代における赤痢の流行は6回で、そのうち地域が明らかにされているのは文政2(1819)年の江戸の流行と文化14(1817)年の広島のみである。季節的には秋と記されたもの、6月、8月または5月末より8月等となっている。年代略記には寛永5(1708)年の流行を“八月、頃日世間疫病<sup>痢疾</sup>流布、所々送<sub>二</sub>疫神<sub>一</sub>”と記し、延享3(1746)年の流行については、治痢経験に“本年秋、近郷有<sub>二</sub>痢疾流行<sub>一</sub>、老人小兒最為<sub>二</sub>多矣<sub>一</sub>”とある。成績録には“秋、疫痢流行”として寛政11(1799)年の流行をあげ、文化14(1817)年の流行については、小間宛痢病論に“丁丑戊寅之歳、我藩(広島)痢疾大行、死者相<sub>二</sub>望於道<sub>一</sub>”としてその惨状も記されている。文政2(1819)年の江戸における流行については、時選読我書に“五月末ヨリ八月頃マデ都下(江戸)大ニ痢疾アリ、斃ルモノ幾人トイフコトヲ知ラズ”と記されている。一名話には文政12(1829)年の流行について、“六月、大風ノ後、赤病ト称シテ、人々五身赤クナリテ二三日ニテ人クルヒ死スルモノ多ク、男子ノ分ハ、赤裸ニナリテ市中ヲ走りテ死ストイフ、其後ハ痢病流行シテ人多ク死シタリ”と記されている。

赤痢の治療は江戸時代中期までは宋以後の療法が用いられ、主として“行<sub>レ</sub>血則便自安、調<sub>二</sub>氣後重自除<sub>一</sub>”という劉河澗の説によって温補の薬を用いたが、中期後には古医方が興って葛根湯、ケシ殻、ケシ汁等の発汗剤が用いられている。このほかゲンノショウコ、熊膽、ショウガ汁、木香等も記録にみられる。赤痢が伝染病であることは江戸時代においても明らかで、滯下方論に“平人

本研究は、疾病地理学の研究をはじめから今日に至るまで、ご指導をいただいた東京大学教授木内信蔵先生の退官記念論文として捧げる。

与<sub>レ</sub>患<sub>ニ</sub> 滞下<sub>一</sub> 人<sub>ニ</sub> , 不<sub>レ</sub> 可<sub>レ</sub> 同<sub>レ</sub> 廁, 不<sub>レ</sub> 得<sub>レ</sub> 已, 則当投<sub>ニ</sub> 家蒜数十個, 及莖菜数握於糞缸中<sub>一</sub>, 云々”とあり, 病人と廁, 褥を共にすることを避けるよう指摘している。

腸チフス 江戸時代における急性伝染病についてはきわめて曖昧で, 一般に冬季の伝染病を傷寒とよび, 夏季のそれを熱病とした。香月牛山は牛山活套の書において“近時ノ俗ノ傷寒ト云フハ, 多クハ瘟疫ノ病, 時行ノ熱病ヲ指シテ傷寒ト云フナリ”として, 伝染病に対する考えの混乱することを示している。当時洋医学においてはチフスの病名があらわれており, この症状を近世中国の医学者は瘟疫と称していた。わが国における当時の洋医学の紹介は, 宇田川玄随, 吉田長叔, 新宮凉庭, 伊藤玄朴, 緒方洪庵等によってなされているが, 神経疫として名づけられたものもあった。緒方郁蔵は文久2(1859)年にストローマイエル Georg Friedrich Stromeier の蘭訳書療疫新法を著わして, 窒扶斯の病名を用い, これがわが国におけるチフスの病名の最初である。

腸チフス流行の記録はきわめて少ないが, 富士川遊氏は急性熱病の腸チフスと推定される流行をあげている。すなわち, 延宝2年, 元禄6年, 宝暦13年, 安永元年, 天明8年, 文化13年, 文化14年, 天保元年, 天保7年, 嘉永5年, 文久3年, 慶応3年等である。中川修亭の傷寒発微の書に“近世, 有<sub>ニ</sub> 一種熱病<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub> 与<sub>ニ</sub> 所謂瘟疫<sub>一</sub> 同<sub>ニ</sub> 也, 罹<sub>ニ</sub> 其病<sub>一</sub> 者, 往往天札矣, 云々……(中略)……三十年来, 其病漸多, 云々”とあり, 文政10年の書であることにより, その流行は寛政年間を示すものと指摘される。新宮凉庭の療治瑣言に“文化13年, 長崎災後, 冬ヨリ翌年ノ夏ニ延テ, 此疫大ニ流行シ, 二三日ノ間ニ, 妄語循衣ノ症ヲ発ス云々”とあり, 長崎の火災後に腸チフスの流行したことを記述している。浅野徹の傷寒論国字弁に“天明四年甲辰ノ春夏, 府下(名古屋外郭ノ細民, 傷寒流行, 一間一家病マザルモノナク, 皆業ヲ廃シ, 戸ヲ閉チテ臥ス, 其前年府西ノ琵琶川決シテ邦内ノ半ヲ害ス云々”とあり, 水害の後腸チフスの流行を示している。以上のように流行の記録は, 流行地域を明らかにしたものは長崎と名古屋で, その要因も火災と水害で, 他についての記録は明らかでない。

コレラ コレラの世界的流行の最初は1816年であるが, わが国における第1回の流行は第2回の世界的流行1820~1837年の影響によって, 仁孝天皇の文政5(1822)年ジャワを経て長崎に伝わり, ここより西南日本全域に伝染している。当時の流行について文献に記述されているものは, 次のような例があげられる。

時還読我書上巻に“文政壬午ノ秋末冬初, 浪華ニ三日

コロリト称スル病流行セリ, 初ハ鎮西ヨリ起リテ九州ニ絶テ行ハサノミ多カラズ中国ニ至リ芸州ナド尤モ甚トイヘリ浪華ニ及ボシ京師ニモ偶マ病モノアリト云々”

大槻玄沢著天行厲氣揮霍療乱病襍記に“文政五年, 壬午十月初旬ト覚ユ, 長州邸ノ医岡田宗伯来リ会ス, 談次曰ク, 吾郷萩府, 八月ノ末ヨリ, 一箇ノ流行病アリ……

(中略)……甚ダ暴卒ノ急症, 二三日ヲ出ズシテ死ス, 其病感染シテ死スルモノ, 近日ニ至テ三千人ニ及ブ……

(中略)……大阪ノ医生齊藤方策ヨリ仙台佐々木中沢へ九月二十六日発ノ書讀ニ, 此節当地ハ急遽劇迫ノ流行病有之, 死者夥敷, 一日ニ二三百人葬候由云々, 此病朝鮮ヨリ発シ候由, 対馬ノ人, 伝染致シ帰候而, 対馬島大ニ流行, 其後長州下之関大ニ死申候而, 追々大阪マデ攻メ登リ申候, 此節ニテハ中国不<sub>レ</sub> 残, 芸州, 広島, 長州萩杯ハ大流行, 死人不<sub>レ</sub> 知<sub>レ</sub> 数ト申ス事ナリ云々, 尚々朝鮮ハ凡ソ四万余人死シタリト云フ, 長州萩ニテサヘ, 八月十四日ヨリ二十五日マデノ内, 死スルモノ五百八十三人ト申来リ候, 泉州岸和田城下九月十三日十四日兩日ニテ百三十四人死シタリト承ハル, 云々……(中略)……去夏以来時疫流行シテ, 役懸リノ者, 多ク死失ニ付, 云々, 扱ハ方今摂泉ノ辺ニ流行スル劇症遠ク彼異方ヨリ到レルトコロナリヤ”。

長州萩の鳥田知のより大槻玄沢に贈られた書に“爰元長州萩ニモ, 当年八月中旬ヨリ, 不正ノ厲氣流行仕候, 死亡ノ人多ク, 一節ハ誠ニ心細キ事ニ御座候, 元来対州大流行ニテ御座候由, 国元ニテハ赤間関ヨリ始マリ, 城下マデニ治マリ候, 大阪又大流行ニ御座候”

安芸の国原田玄庵の治孫疫癘考には“文政五年秋, 天行吐利大流行, 人民死亡者数多也, 此疾初起<sub>ニ</sub> 於対馬<sub>一</sub>, 而渡<sub>ニ</sub> 於長門<sub>一</sub>, 至<sub>ニ</sub> 於我芸国<sub>一</sub>, 漸伝染而及<sub>ニ</sub> 浪華<sub>一</sub>, ”。

佐々木中沢の天行病説には“壬午初冬, 得<sub>ニ</sub> 大阪齊藤方策書<sub>一</sub>, 曰, 今茲八月, 山陰山陽二道, 厲氣流行, 至<sub>ニ</sub> 九月<sub>一</sub> 益盛, 罩<sub>ニ</sub> 及畿内<sub>一</sub>, ……(中略)……雖<sub>レ</sub> 以<sub>ニ</sub> 大阪繁庶<sub>一</sub>, 一月計<sub>レ</sub> 之, 率不<sub>レ</sub> 下<sub>ニ</sub> 数千人<sub>一</sub>, 棺槨相望, 慟哭載<sub>レ</sub> 路云々”。

大阪の人奥田真五平の経験日新録に“三日コロリト云フ病, 文政五年壬午秋八月下旬ノ此ヨリ卒発シ, 其症, 吐瀉腹痛, ……(中略)……或ハ二三日ニシテ死シ, 或ハ五七日シテ斃ルモノアリ, 人名ケテ三日亡<sub>コロリ</sub>ト称ス, 其九月ニ至リテ専流行シ, 死スル者益々多シ, 十月下旬ニ至リテ流行漸ク止ム”。

松浦久功の暴卒病試效には“文政五壬午九月重陽後ヨリ十月ニ至ル, 浪華ニ一種ノ暴卒病流行ス, 其初安治川ニテ西国辺ヨリ来タレル舟泊セルガ有リ, ソノ舟中ニ此

病者アリシヲ、宿シタル家、挙家悉クコノ病ニ斃ル、ソレヨリ漸ク広マリ、処々ニ蔓延ス、但シ川筋ヲ伝ヘテ流行ス、故ニ浪華西辺最も多ク、ソレヨリ島ノ内辺ニ広ガリ、天満上町ニ及ブ、後ニハ伏木、木津ナド、舟著ノ所多シ、京都ハ七条辺ニ多シ、漸ク四方ニ広マレリ、此病中国ニ始マリ、長芸ニ州甚シク三備、播州ニ伝ハリテ、終ニ浪華ニ至レリト云フ、云々”とある。

岩永霍齊の医事雑話には“讃州高松ニ滞留、帰路十月九日、播州赤穂著船、赤穂城下阿賀屋某ニ至ル、往來市中、屋毎ニ門松ヲ植ヘ、往連繩ヲ引廻シ、恰モ年始ニ異ナラズ、予其故ヲ問フニ、主ノ云ク、大阪ニ三日コロリト云フ惡病流行シテ其死スルコト数ヲ知ラズ、当地ノモノモ多ク感ジテ死シテ婦ルモノ毎ニ不レ知レ數位ナリ、依テ国君ヨリ歳改ヲ仰付ラレ、正月年始ノ模様ヲナスナリ、云々”

中川勝齊のコレラ記事上巻には“三十七年前文政五年コロリ病流行ノ時ニ當リ、此地堀江<sup>大阪</sup>ニ住ス、当時病勢今年<sup>安政五年</sup>ニ比スレバ、稍緩ニシテ、真ニ三日コロリナリ、其流行西南隅ヨリ発ス、京地モ押位、東寺辺ヨリ発スト云ヘリ”と記している。

天行三日病記には“文政五壬午年、秋冬ノ交、一奇疾流行、云々、此病其始朝鮮国ニ起リ、本邦ニ伝ヘ、西国中国盛ニ行ハレ、摂河泉ノ三国最も多シト申スコトニ御座候、幾モナクシテ御府内<sup>伊勢桑名</sup>ニ来タリ、患ルモノモ間マ有之候得共、衆口風説ノ囂々タル程ハ無レ之”。

中川修亭より桂川甫賢に送られた書に“駿州沼津辺ノ医生ヨリ書状参リ、去冬文政五年右ノ証<sup>暴病</sup>ヲ両三人療シ候由申來候、其証ハ此元大阪流行ノ症ニ少モ違レ申候”と記している。

小畑良卓の瘟疫論發揮によれば“壬午之疫、其初自朝鮮ニ、伝ニ吾西州ニ、歴ニ山陽ニ、迨ニ浪華ニ、無レ論老少強弱ニ、闔戸伝染、勢如ニ破竹ニ、死者、曰三四百人”とある。

桂川甫賢の酷烈辣考によれば“文政壬午二月、和蘭人入貢ス、余例ニ依テ、其使臣ニ旅館ニ会ス、酋長ブロムホフ曰ク、客歲夏月瓜哇島拔太非亜ノ地、船ヲ貴国ニ発スルノ候ニ方テ、一種ノ流行病アリ、本国ヨリ祇役セル欧羅巴人及ビ土人ト共ニコレガ為ニ殞スルモノ挙テ計ルベカラズ……(中略)……コレ羅甸ニ所謂酷烈辣莫爾蒲私ニシテ……(中略)……天行不正ノ氣、客歲瓜哇島ノ辺ニ起リ、終ニ延テ、我邦ニ到レルナルベシ”。

コレラの病名については、文政5年の流行とともにオランダ人ブロムホフよりの書によって、桂川甫賢、大槻玄沢、佐々木中沢等はコレラを音訳して酷烈辣としている。江戸時代の俗称はコロリと呼ばれているが、コレラ

の転語ではなく、卒倒を意味する病名である。その他暴瀉病、暴痧病、後には霍乱の名があげられている。

わが国における文政5年の第1回コレラ流行について以上の諸記述によると、伝来地域はジャワによるものと朝鮮によるものがあるが、記述に明かなように後者は単なる憶測によっている。これに対して桂川甫賢の酷烈辣考の記述はオランダ人ブロムホフによって伝染経路に立証性がある。これはアメリカ地理学協会 American Geographical Society 出版よりなる世界疾病地図のコレラ伝染経路と一致している。

この第1回流行において、文献に記された国名または地域名をあげると、鎮西、芸州、長州、対馬、対州、摂州、泉州、摂河泉三国、浪華、西国、西州、中国、山陽、山陰、三備、播州、畿内、駿州、伊勢等があり、このうち、流行のはげしかった地域としては浪華、芸州があげられている。また流行の都市名としてあげられているものには、長崎、萩、大阪、下関(赤間関)、広島、京都、伏木、木津、沼津等がある。

第2回のコレラ流行は安政5(1858)年で、この流行については、次のような記述がみられる。

虎狼痢治準に“安政五年七月、此病長崎ニ流行ス、都下ノ医皆之ヲ療スルコトヲ得ズ、官ヨリ在留ノ和蘭医ボムベニ命ジテコレヲ療セシム云々”とあり、オランダ医官ボムベ、フアン、メールデルフォードが長崎奉行所に差出した書に“於ニ出島ニ千八百五十八年第七月十三日此両三日中、出島市中トモ、一時ニ下痢且追々吐カカリ申候、右患病ノ者既ニ昨十二日、一時ニ三十人相煩、将又重墨利加蒸気船ミシシッピーニ於テモ、右様ノ腹病多人数御座候……(中略)……隣国唐土ニテモ、諸街市海岸ニハコレラ、アシアテイス(病名)流行仕、右ニツキ日々死失多人数御座候由、依レ之、出島ニ罷在候欧羅巴人ドモニツキテハ右下痢、殊ノ外変症仕、真実ノコレラ病ニ不ニ相成ニ様防方可レ仕儀ニ御座候云々”とある。

印度霍乱説には“安政五戊午之八月、於ニ我播之地方ニ、所レ行之病患、其死之迅速、如レ覆レ手、……(中略)……不ニ唯我地方ニ、摂泉及備西海東海山陰諸道及沿海諸地、皆有レ之云、而人怖レ之、如ニ虎狼ニ、俗称レ之、曰ニ虎狼利ニ、”と記されている。コレラ記事には“安政五年戊午、仲夏ヨリ深秋ニ至リ、諸国コロリ病大ニ流行ス、八月下旬ニ至テ京師初メテ行ハル、然レドモ、幸ニ流行遅キヲ以テ、長崎、江戸、浪華等ノ流行病状ヲ伝聞シ、……(中略)……兇邪暴行トイヘドモ、救治ヲ得ルモノ亦少カラズ、然レドモ、ソノ盛ナル時ハ一日百数十人ヲ斃ストイフ”とある。

疫癘雑話街遇夢には“安政五年ノ歳、七月二十四五日

ノ頃ヨリ、奇態ノ病流行シテ人死スルコト夥敷、……  
 (中略)……元来此病ノ起リハ、上方筋ヨリ流行来タリ、  
 東海道一円ナレドモ、其中ニ金谷島田ノ両宿甚敷、又府  
 中江尻蒲原小田原ニ至リテハ、七月二十二日ヨリ八月四  
 日、十二日ノ間ニ三百九十一人死シタル由… (中略) …  
 江戸表ニテ、夥シクナリシハ八月四日コロヨリノコトナ  
 ルベシ、尤モ七月二十六日ヨリ八月七日マデニ二千百二  
 十二人死去致シ候趣、町奉行ニ御届ニ相成候ヨシ… (中  
 略)……又日本橋ヨリ京橋マデハ町四方ノ間、七月晦日  
 ヨリ八月八日マデニ三百二十人死セシヨシ、云々”と述  
 べられている。

橘黄年譜には“安政五年六月、肥前崎陽暴瀉流行シ、  
 西国ヲ経テ浪華京師ニ及ビ、七月下浣ニ迫テ江戸ニ流転  
 ス、其病ニ伝染スルモノ筋ヲ射ルガ如ク… (中略) …  
 忽チ鬼籍ニ上ル者、男女併セテ、武家二萬二千五百五十四人、  
 町家一萬八千六百八十人ト云フ云々、九月上旬ニ  
 至リテ始メテ病根絶ス”とある。また治瘟編には“今歳  
 之疫<sup>安政五年</sup>則自<sup>安政五年</sup>崎陽<sup>安政五年</sup>始、経<sup>安政五年</sup>山陰南海<sup>安政五年</sup>、而遍<sup>安政五年</sup>于天下<sup>安政五年</sup>、云々”とある。

河島維馨の知新録によれば、“安政戊午之歳、哥列羅  
 大行、閩国諸州、不<sup>レ</sup>患<sup>レ</sup>此病<sup>ニ</sup>之地少、就<sup>レ</sup>中、以<sup>レ</sup>  
 江戸<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>多、京摂次<sup>レ</sup>之、当時余在<sup>ニ</sup>于駿府<sup>ニ</sup>、療<sup>レ</sup>  
 此病<sup>ニ</sup>者、不<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>三百人<sup>ニ</sup>、曾開<sup>ニ</sup>其死<sup>ニ</sup>者八百余人  
 以<sup>ニ</sup>此数<sup>ニ</sup>、江戸則当<sup>ニ</sup>五十倍<sup>ニ</sup>、云々”と記されている。

江戸の流行については数多くの文献があげられる。田  
 宮尚施の暴病管見には“安政五年戊午ノ初秋ヨリ東武ノ  
 都下、忽然トシテ悪疫流行セリ、…… (中略) ……既ニ  
 シテ重九已後ニ至テハ此病モ漸次ニ薄ク、今霜露稠キニ  
 及デ、殆ト地ヲ掃フニ至ル”。嘉永明治年間録には“暴  
 瀉病七月下旬ヨリ天下普ク流行、阿蘭陀ニテハコレラト  
 イフヨシ、兩三度モ暴瀉スレバ更ニ治シ難シ、故ニ是ヲ  
 コロリ病ト通言スルナリ、八月中、江戸中町屋許リ病死  
 人一萬二千五百九十三人ト云フ、全流行始終七月二十日  
 頃ヨリ九月十日頃迄、凡五十日ノ間、武家及寺院町方等  
 人別書上ニ洩レシ者共、大概差加ヘ、凡三萬人程ノ死亡  
 ト云フ”。

頃瀉流行記には“安政五戊午年六月下旬、東海道筋ヨ  
 リ暴瀉病流行初、近国一円ニヒロガリテ… (中略) …  
 大江戸ハ七月ノ上旬、赤坂辺ニ始マリ、霊岸島辺ニモ多  
 クアリテ、日ナラズ諸処ニ押移リ、八月上旬ヨリ中旬ニ  
 至リテハ病倍々盛ニシテ、死スルモノ多キハ一町二百余  
 人、少キハ五六人云々”。武江年表には“七月末ノ頃  
 ヨリ、都下ニ時疫行ハレテ、芝ノ海辺、鉄砲州、佃島、  
 霊岸島ノ畔ニ始マリ、家毎ニ此病瀉ニ羅ラザルハナシ

東海道駿河ノ辺ヨリ八月ノ始ヨリ、次第ニ熾ニシテ、江  
 ハヤリ来リシト云  
 戸中並近在ニハビコリ… (中略) …九月初旬ヨリ些  
 シク遠ザカリ、十月ニ至リテ漸ク此噂止ミタリ”と記さ  
 れている。

山田椿庭の戊午疫癘記には“安政五年七月ノ末、築地  
 辺ニテ卒病行ハル、俗ニ一時コロリト云フ、八月ノ初ヨ  
 リ一時ニ甚シク、十日頃ニハ本郷盛ニナリテ、十三四日  
 頃ニハ塾徒東西ニ奔走シ、昼夜睡ルコトヲ得ズ云々、九  
 月ニ至リテ漸々減ジ、下旬ニハ一人モ診セザルヤウニナ  
 リヌ”と述べている。

第2回の流行については以上の通りであるが、これら  
 について文献に記述してある流行地域名をあげれば、肥  
 前、播州、摂泉、備西海、東海、山陰、沿海諸地、南海、  
 京摂、上方、府中、西国、崎陽、駿河等があり、都市名  
 には長崎、江戸、浪華、金谷、島田、江尻、蒲原、小田  
 原等があげられ、江戸の地名には日本橋、京橋、赤坂、  
 霊岸島、芝、築地、鉄砲州、佃島、本郷等である。

第2回のコレラ流行の特色としては、文献によれば、  
 わが国の流行始発地を長崎としていること、流行におい  
 て江戸が最も甚だしかったこと、流行期が初夏にはじま  
 り、9月下旬または10月に流行が止んだこと等である。

日本災異志に掲載されている安政5年7月27日より9  
 月23日まで、55日間の江戸中の諸宗寺院死人書上写によ  
 る死亡者数は次の通りである。

	人		人		人
浅草	15,148	麻布	6,667	目黒	1,460
下谷	12,849	目白	945	白金	1,374
小石川	1,907	四谷	2,155	品川	2,679
牛込	2,041	渋谷	1,090	向島	1,482
水道町	754	飯倉	969	押上	2,076
青山	1,897	三田	3,348	深川	8,459
本郷丸山	1,031	金杉	1,900	本所	6,109
市ヶ谷	2,117	高輪	683	西本願寺	13,500
原町	1,037	二本榎	1,112	東本願寺	11,820
雑司ヶ谷	584	西久保	1,112	増上寺	1,987
赤坂	2,890	切通シ	991	真法寺	672
		総不残高	268,057人		

この諸宗寺院死人書の死亡者数をみると、浅草、下谷、  
 西本願寺、東本願寺がいずれも1万人を越え、とくに下  
 町に流行の多かったことがわかる。しかし、それらの死  
 亡率については、その時点の人口が明らかでないため、  
 知ることができない。

安政5年8月朔日より、晦日までの1カ月間における  
 頃瀉流行記に記載された死亡者数は次の通りで、9日よ  
 り19日までの11日間は毎日500人以上を数え、初旬に比

較的少ない。

1 日	112人	11日	507人	21日	392人
2 //	107	12 //	579	22 //	363
3 //	155	13 //	626	23 //	370
4 //	172	14 //	588	24 //	379
5 //	217	15 //	508	25 //	414
6 //	350	16 //	622	26 //	397
7 //	406	17 //	681	27 //	416
8 //	415	18 //	561	28 //	435
9 //	565	19 //	597	29 //	447
10 //	559	20 //	469	30 //	333

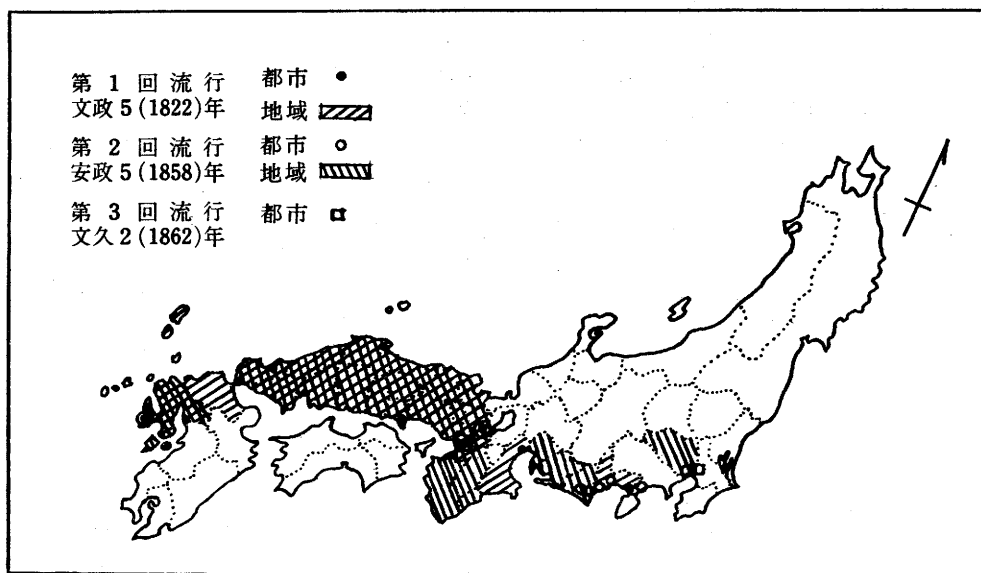
合計12,492人で、この外に人別なしの者の数は18,737人と記され、9月には減少していることを追記している。

安政5年の流行における江戸のコレラ死亡者数は、文献によって異なり、前述の橘黄年譜が最も多く、武家、町人を合わせて41,234人となっている。疫毒予防説によれば、男女合わせて28,421人とし、武江年表では武家市中社寺の男女凡そ28,000余人とし、その内火葬によるもの9,900余人と述べている。嘉永明治年間録の記述は凡

そ3万人としている。

安政6年および萬延元年にもコレラの流行が続いており、新宮涼閣のコレラ記事に“京地此病ニ死セシ人数ヲ京尹属吏某ニ問フ、曰ク、六月ヨリ九月晦日マデ洛中千八百六十九人、洛外八百三十五人”とある。武江年表には“七月下旬ヨリ、去年行ハレシ暴痧病再ビ行ハレ、男女死亡多シ、九月ニ至リテ止ム、南都、泉州、大阪ノ辺ワケテ行ハレシヨシナリ”として関西の流行を記し、とくに京都、大阪、奈良を指摘している。

第3回のコレラ流行は孝明天皇の文久2(1862)年にみられ、この年は麻疹の流行があり、その後コレラが流行している。コレラ経験談には“今年壬戌(文久二年)自レ夏迄レ秋、麻疹挟ニ霍乱ニ、又大行、都下(江戸)死望相望”と記されている。疫毒予防説には“今茲文久壬戌ノ夏、麻疹大ニ行ハレテ、後再ビコレラ病盛ニ行ハレ、云云、其死ニ至ルモノ、先般ノ流行ニ比スレバ、其幾倍ナルヲ知ラズ云々”とある。武江年表には“文久三年七月、暴瀉病少シク行ハル、死亡ノ者、去年ノ半ヨリ少ナシ”と記され、第3回の流行が2年続いたことが知られる。第3回の流行については、第2回のそれに比して文献に記述されたものがきわめて少なく、流行地域は江戸があげられ、他地域についてはみられない。



江戸時代の文献にあらわれたコレラ流行地域

## 2 呼吸器系結核

肺結核 肺結核は古くから咳嗽を伴う病気であるため労咳または肺労と呼ばれていた。わが国における医方については、中国医方の影響が大きく、肺結核についても

隋における巢元方の病原候論、唐の王靈の外台秘要方による虚勞、伝戸の説も入れられた。結核の語は果核様の硬結した腫瘍の形態から名づけられたもので、わが国でも延宝7(1679)年に名古屋の玄医が、医方問余の書に

において、“独形而小核者為<sub>二</sub>結核<sub>一</sub>”と述べている。江戸時代の後期に至り西洋医学の影響によって、肺結核についての知識が普及するようになった。本間玄調は洋医学と漢医方の両者を折衷し、その内科秘録の書において“此病、一種ノ伝染毒ニシテ、……（中略）……或ハ血脈ヲ引テ伝染シ、或ハ親近スルニテ伝染スルノ二途アリ、或ハ宮室、器什、衣服等ヘモ其毒浸淫シテ人ニ伝染スルコトアリ”として、遺伝と伝説をとりあげている。肺結核に関する江戸時代の文献は病原、解剖等を主としたもので、現時点においては流行についての記録を見ることはできない。

### 3 梅毒

梅毒については、西インド諸島のハイチ島から1492年コロンブスのアメリカ大陸探険の一行が感染してヨーロッパに伝染、蔓延させたとの説が強力である。しかしわが国においても古くより存在したとする説もある。貝塚より発掘された人体骨に梅毒性変化がみられるという考古学者の説も否定することはできない。世界航路の発見は文化の伝播に大きな貢献をしているがしかし反面において伝染病の流行、伝播にも大きな影響を与えている。1498年ヴェスコ・ダ・ガマのインド航路の発見は、その後ポルトガル人によってゴアに梅毒が伝播され、それより中国、日本に伝えられた。わが国における梅毒流行の記録は、室町時代の永正9（1512）年にみられ、江戸時代においては流行に関する記録はきわめて少ない。香月牛山の牛山活套には“便毒一変シテ楊梅瘡トナル、京都、大阪等ノ都会ノ所ニ多キ煩ナリ、鄙野ノ地ニハアルコト少ナシ云々”とある。梅毒の治療についての医学書はきわめて多く、西洋医学より梅毒を取りあつた洋方医書も数多くみられた。

### 4 他の細菌による伝染病

癩 癩病については古代よりその病名があらわれており日本書記令義解、に白癩の名があり、奈良時代に対癩施設が設けられた。江戸時代後期の漢洋両医学の折衷医家、本間玄調は、瘍科秘録の癩の病因について“飯食ヲ慎マズ縦ニ禽獸ノ肉及叔鮓、鰯鯉魚、鰻等ヲ食シテ自然ト敗血ヲ生ジ諸瘡瘍ノ病因トナリ其内ニテ敗血凝滯スルコト劇シキモノハ厲風ニ化スルナリ、自発スルモノハ此因ヨリ起レドモ父母ノ血脈ヲ伝ヘテ患ルモノ多シ”として癩が食物による病因と遺伝による説を唱えた。江戸時代の癩の記録は治療に関するものが散見する程度で流行についてはみられない。古くより癩患者は悪疾、業病の人として嫌われて隔離された。薬剤には西インドの原住民が使用した大風子油が江戸時代初期に南蛮人（ポルトガル、イスパニア人）より伝えられていた。また癩の治療には

焼針、灸なども用いられ、江戸時代長崎に在留したオランダの医師リーネ Willem ten Rhyne は日本の鍼灸をヨーロッパに紹介している。

### 5 濾過性病毒による伝染病

痘瘡 わが国に痘瘡の流行したのは奈良時代の天平7年がはじめて、豌豆瘡、<sup>ワンスカサ</sup>裳裳、<sup>モカサ</sup>疫瘡、赤斑瘡などの呼び名があった。平安時代に至って痘瘡の名がみえている。鎌倉時代には痘瘡、赤斑瘡の名で記され、モカサの訓がつけられている。江戸時代には痘瘡、痘疹と呼び、俗にイモ、モカサ、ホウソウとも云った。

江戸時代に至っても痘瘡についての知識は明医学の域を出ず、胎毒と時行による二説にとどまっていた。胎毒は胎内にあるとき淫火の熱毒を受け、その毒が腹のうちにかくるをいい、時行は伝染によるものである。これらの説を唱えたのは香月牛山、池田錦橋等であった。橋本伯寿は文化年間、痘瘡、麻疹、梅毒、疥癬の四病を有形伝染によるものとして、その毒が異国より伝わって人人に伝染するものであるとした。さらにその伝染の方法について“痘瘡ノ伝染ニ三アリ、第一ハ痘瘡病ニ近ヨリテ熱氣鼻ニ入ルトキハ、仮令其臭ハ知ラズトモ、必ズ毒氣ニカブルナリ、第二ハ痘瘡病ノ玩物、スベテ病中寝処ニアリシ物ヲ手ニ触レテモ伝染ス、第三ハ痘瘡家ノ食物ニテ伝染ス、是ハ至テスミヤカナリ”と述べている。山川揚庵は熱病叢原に“痘毒本是、始<sub>二</sub>千絶遠遐陬之地<sub>一</sub>、漸漸伝播、延及<sub>二</sub>吾邦<sub>一</sub>、爾来其毒、依<sub>二</sub>抛人体<sub>一</sub>、以発<sub>二</sub>動其本性<sub>一</sub>、伝<sub>レ</sub>彼、染<sub>レ</sub>此、輾転流行、云々”として、伝染病であることを明らかにしている。

痘瘡に鬼神があるという説は古く中国より伝わっている。原南陽の叢桂亭医事小言に“問曰、本邦患<sub>二</sub>痘之家<sub>一</sub>、必設<sub>二</sub>神殿<sub>一</sub>、祭<sub>二</sub>祠之<sub>一</sub>焉、中華亦有<sub>二</sub>如是類<sub>一</sub>乎、答曰、有、請聞<sub>レ</sub>之、居告<sub>レ</sub>汝、有<sub>二</sub>痘瘡司五位<sub>一</sub>”とある。江戸時代には痘瘡を患う者が、とくに痘神を指定して祭ることがみられた。元禄年間、香月牛山の小児養育草に“ワガ日本ノ風俗、コトサラ神明ヲタツブ国ナレバ、其家痘ヲ煩フモノアレバ、神ノ棚トテ、新ニコシラヘ、御酒、供物等ヲソナヘ、祭ルコトナリ、云々”とある。また“今時ノ神道者ハ、痘瘡ノ神ハ住吉大明神ヲ祭ルベシトイヘリ、住吉大明神ハ三韓降伏ノ神ナリ、痘ハ新羅ノ国ヨリ来タル病ナレバ、此神ヲ祭リテ、病魔ノ邪氣ニ勝ツベキ事ナリトゾ、云々”として、当時の人心が病氣に対して、神に依存するその心境を察することができる。痘瘡の神として記録にみられるものには、出雲国大社の末社として鷲森明神があり、痘瘡氏勝秘伝集に、本柴西川の御穂神社、品川戸越の戸越八幡宮、本所牛島の牛御前、浅草寺内の痘瘡神之社、同じく神田大明

神内、芝三田の護諸童子、牛込の若宮八幡、上野黒門東の五条天神、雑司ヶ谷の鷲大明神、浅草新町の白山権現、京都の御霊八所大明神等があげられる。

江戸時代において、痘瘡の流行のなかった地域に痘瘡が伝わると、その流行はとくにはげしかったことが知られる。原南陽の叢桂偶記に“寛政八年丙辰五月三日、常陸那珂湊、一船漂着、所乗十一人、問之、曰、伊豆三宅島船也、去年七月二十二日、載<sub>二</sub>流徒<sub>一</sub>、送<sub>二</sub>八丈島<sub>一</sub>、十月至<sub>二</sub>島<sub>一</sub>、今年四月発<sub>二</sub>島<sub>一</sub>、遇<sub>二</sub>西風<sub>一</sub>至<sub>二</sub>于此<sub>一</sub>、当日検<sub>レ</sub>之告<sub>レ</sub>官、令<sub>二</sub>吏賜<sub>二</sub>糧食<sub>一</sub>、内有<sub>二</sub>八丈島民三人<sub>一</sub>、曰八丈島自<sub>レ</sub>古無<sub>二</sub>痘瘡<sub>一</sub>、方今一般流行、斃<sub>二</sub>于此病<sub>一</sub>者日多<sub>一</sub>一日<sub>一</sub>、……（中略）……寛政乙卯、九月二十七日、八丈島船自<sub>二</sub>伊豆<sub>一</sub>歸、所<sub>レ</sub>乗三根村民、於<sub>二</sub>船中<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>病、十月三日周身発<sub>レ</sub>紅、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何病<sub>一</sub>医議曰、痘瘡也、本島從來無<sub>二</sub>此病<sub>一</sub>、今有<sub>二</sub>此症<sub>一</sub>、恐伝<sub>二</sub>染外人<sub>一</sub>、……（中略）……先<sub>レ</sub>是天明年間島内榎立村痘疹流行、死者甚多、云々”。なおこの偶記にこの島における病痘者とその死者数が記されている。三根村男女千四百余口、患者千二百人、死者四百六十人、榎立村男女九百余口、患者百三人、死者二十九人、末吉村男女八百余口、患者五十五人、死者十五人、青島男女百五十余口、患者十九人、死者十三人等である。

国字痘疹戒草巻上に“肥前国天草、肥後国熊本、周防国岩国、紀伊国熊野、信濃国木曾山中、御嶽山ノ辺等ニオイテ、痘瘡患フモノアレバ、一郷一村ヲ隔テ、人家ヲ去ルコト一二里ニシテ、山野深谷ニ小屋ヲシツラヒ、或ハ農家ヲカリテ傍人ヲ附ケ置キテ、食物ナド、始ニ運バセ、一家親類タリトモ出入ヲヤメテ、医ヲ迎ヘテ薬ヲ用フルコトモ、少ナシ”とある。痘瘡問答に“肥前大村及び肥後天草ノ如キ、痘瘡ヲ懼ルルノ甚シキ、若シ痘疫内地ニ入レバ、父母兄弟妻子ノ差別ナク、皆コレヲ山野ニ捨テテ、決シテコレヲ顧ミズ、唯ソノ死生ノママニシテ治療ヲ加フルコトナシ、云々”として痘瘡の伝染を恐れた様子を知ることができる。断毒論には“豆之八丈島、信之御嶽、秋山、飛之白河、北越之妻有、紀之熊野、防之岩国、予之露峯、土久別枝、肥之大村、天草、五島、奥之蝦夷、自<sub>レ</sub>古至<sub>レ</sub>今、皆能避<sub>二</sub>痘之伝染<sub>一</sub>、云々”とあり、隔絶地域に痘瘡の伝わらないことを記している。

痘瘡の予防について、中国においては宋、明の頃より人痘種法がおこなわれ、清の時代に盛んであった。わが国にこの種法を伝えたのは延享元年（1744）年、中国杭州の医者李仁山が、長崎において、この法を施している。これによってわが国においても種痘が盛んにおこなわれ痘瘡の予防、治療に役立ったことは確かである。

イギリスのジェンナーの発明による牛痘種法が、中国を経てわが国に伝わったのは、天保の末のころである。わが国に種痘の書が校刻されたのは天保12（1841）年であり、種痘奇書によれば“天保十二年（或ハ十三年）江戸ノ大槻俊齊ガ高島ヨリ得タル痘苗ハコレヲ浅草蔵前伊勢屋ノ児ニ接種シテ効アリシト云フ”とある。

江戸時代における痘瘡に関する記録は、流行地域についてはきわめて少なく、ここでは流行が全地域的で、流行しないのは隔絶地域であることを、その疾病の伝染病であることの立証のために記している。

麻疹 麻疹の流行は古代には痘瘡と混同したことがみられ、古代に赤瘡斑と呼ばれ、疱瘡をモカサと呼び、このモカサに似て赤いための呼び名である。鎌倉時代にはハシカと呼ばれ、室町に至ってイスナリの語がみえるようになった。イスナリは麻疹にかかる喉中が稲芒でえられるような痛みからの命名であるといわれる。

麻疹の流行記録は武江年表に多く、その流行は元和2年10月、慶安2年3月、元禄4年4月、宝永5年、享保15年、宝暦3年、安永5年、享和3年、文政7年、天保7年、文久2年があげられ、他の記録とあわせて、ほとんどの流行をとりあげている。宝永5（1708）年の流行は牛山活套によれば、“日本六十余州ヲシナメテ”とあり、久守記には享保15年10月には京畿諸国流行と記されている。宝暦3（1753）年の流行について、その地域を示す文献は、麻疹精要方序に“宝暦癸酉歳、夏秋之際、東都麻疹大流行矣、云々”として江戸に流行したことを記し、麻疹気候録には“宝暦三酉年、夏ノ頃麻疹ハヤルコトアリ、此時ハ九州ヨリ上方ヘ至ル、”として九州、京畿の流行を示している。安永5（1776）年の流行については、麻疹必用に“諸国死人多ク”とあり、医事雑話には、“三月、大阪麻疹流行ス”と記されている。

享和3（1803）年の流行は最もはげしいもので、記載文献の数も多い。麻疹略説には“天下麻疹大流行、関東、鎮西、南裔、北国、春秋之際大抵一時ニ流行ス、況ヤ京、摂ヲヤ”として全国流行のあったことを示している。塵塚談には“四月ヨリ、江戸麻疹大ニ流行、貴賤多ク之ヲ患フ云々”とあり、麻疹啓迪は流行の地域と時期について述べ“二月ノ初、長崎ノ地、麻疹行ハル……（中略）……三月ノ末、四月ニ入り、大坂ニ来タレバ、此患専バラ行レ、京ニ出テ暫滞留ノ際ハ、同症七十八人マテ治療シテ帰レリ、京地モ一般ナリトゾ、江戸ハ三月末ヨリ四五月ノ間、盛ニシテ六月ニ及ビテ少ナリ、四月末ヨリハ己ニ北漸ス”とある。文政7（1824）年の流行については、西国と都下の地域が記され、天保7（1836）年の流行は都下だけがあらわれ、いずれも享和3年の流行にくらべ

て輕微であったことが知られる。

文久2(1862)年の麻疹流行も甚だしく、武江年表には、“二月ノ頃、西洋ノ船崎陽ニ泊シテ、コノ病ヲ伝ヘ次第ニ京、大阪ニ弘マリ、三四月ノ頃ヨリ行ハケルヨシ、江戸ニ肇マリシハ小石川某寺ノ所化何某二人、中国ヨリ江戸ニ来リシ旅中ニ煩ヒテ云々”とあり、中国の人が江戸に病を伝えたことを明らかにし、さらに江戸におけるその後の流行の様子については、“寺院ハ葬式ヲ行フニ違ナク、日本橋上ニハ一日棺ノ渡ルコト、二百ニ及ベル日モアリトゾ”と記している。また橘黄年譜には“是歳諸国麻疹流行シ、夏六月中旬ヨリ江都一般之ヲ患フ、云々”とある。

さらに麻疹の地域的流行を記載しているものは、伊豆下田、甲州高室村について断毒論があげられる。

## 6 リケチア病

ツツガムシ病 平安時代の頃より沙虱毒として知られていたが、江戸時代に至って地域に関する罹患の記載が少ないながらもみられる。多紀元堅の時還読我書に“越後新潟ノ辺ニ一種ノ病アリ、土人海ニ近キ河畔ニテ、草茅ヲ刈ルトキ、身中忽ニ虫ニ螫ルルコトアリ、其虫至テ細ク毛髪ノ如シ、螫ルルトキハ寒熱ヲ発シ、恰モ傷寒ノ如シ、土俗之ヲ呼テツツガト云フ”と記し、さらに“此レ沙虱ノ類ナラン、其螫所ヲ渴シテ愈ユト聞ケリ”と述べている。越後新潟の辺と海に近き河畔、そして草茅を刈る場所は、その後明治以降の発生地よりみれば明らかに信濃川および阿賀野川下流地域の河畔であることが推定される。また橋本伯寿は、“本邦筑魔水辺、有<sub>二</sub>射工俗名曰<sub>二</sub>都都瓦<sub>一</sub>、土人云、旱歳多、水歳無、蓋此虫、為<sub>二</sub>洪水<sub>一</sub>流失也”として、ツツガムシが洪水に流失してその発生数の少ないことを指摘している。そのほか大友玄圭は秋田地方にケダニと称スル病のあったことを記し天保6年には米沢藩内にこの病気が発生したことが知られている。

## II 呼吸器系疾患

流行性感冒 平安時代に咳逆、咳病、シハブキヤミと名づけられた病気が流行しており、下って江戸時代には風邪、風疾、流行風(ハヤリ風)が数回流行し、この風邪をまた傷風、時気感冒あるいは天行感冒とも呼んでいた。

江戸時代における流行性感冒の流行に関する記録は25回に及び、そのうち流行地域を取扱っているものは、紀事による慶長19年の9月の畿内、近畿、元禄6年には牛山方考に国中と記されている、正徳享保間実録には江戸の風病流行死者八萬余人と記し、“葬ガタキ亡骸ヲバ回

向ノ後ニ、菰ニ包ミテ舟ニ乗セテ悉ク品川沖ヘ流シ、水葬ニナサレシト云フ”と述べ、その流行のはげしかったことを語っている。享保15年の流行については享保世説に長崎より流行来ると記され、成形図説には享保18年の大阪の流行に三十三万七千四百十五人と点検したことがあげられ、一語一言には“丑七月十日前後ヨリ江戸町中其後国々在々迄、風邪ハヤリ云々”とある。延享元(1744)年および同四年の流行については、武江年表にいずれも諸国風邪流行とあり、明和6(1769)年の流行については、統皇年代略記に京畿諸国、泰平年表には、“二月上旬諸国風邪流行、又八月京大阪江戸及諸国風邪流行人多死云々”とある。

享和2(1802)年の流行については、閑田次筆に長崎九州、上方、京の地域名がみられ、随意録には西京、大阪、諸国流行があげられている。文化5年の流行は関八州、京摂がみられ、文政4(1821)年には江戸諸国、都下、関東の名があり、曲尊雜記には、“此風邪ハ京撰ヨリ、東ハ安房、上総、西南甲斐、伊豆、北ハ信濃、越後マデモ流行ス”と記されている。安政4(1857)年の流行については疫邪流行年譜に京坂より東海道を流行して来たことが記述されている。

江戸時代の風邪流行は、その年によって特殊な名がつけられている。安政元年の風邪はその年に米艦が横浜沖へ来たためにアメリカ風と呼び、天保3年の風邪は琉球人の来朝によって琉球風と名づけられた。享和2年には八百屋お七の小唄の流行により、その年の風邪をお七風とよび、文化5年の風邪は、里巷の小唄により子ンコロ風と名づけられている。

## III 物質代謝疾患

脚氣 脚氣の記録は古く晋、唐の代にはじまり、わが国においても日本書紀、続日本紀に脚病の名がみられる。脚氣の呼名がはじめて出ているのは日本後記で、大同3年藤原緒嗣の上奏文に“臣生平未<sub>レ</sub>幾、眼精稍暗、復患<sub>二</sub>脚氣<sub>一</sub>、云々”とある。しかし脚氣の疾患が多く記録にみられるようになったのは江戸時代で、香月牛山の牛山活套に“今時仕官ノ人、或商人モ東武ニ至リテ鬱氣シ、足膝痿軟ニシテ面目虚浮シ、飲食進マザル者ヲ俗ニ江戸煩ト云フ、是皆水土ニ服セザルノ類也、故郷ニ歸ルトテ箱根山ヲ越エレバ、多ハ其症治セズシテ、自ラ平服ス、牛山嚮ニ官ニアル時江戸ニテ西国ノ諸侯ノ屋敷ヲ見聞スルニ、何ノ所ニモ此病アラズト云フ者ナシ云々”と記し、この病気が特に江戸に多く発生し、そのために江戸煩の名がみられている。山脇東門の東門隨筆には“脚氣病ハ唐、王寿ガ外台秘要方ニ精シク見エタリ、二

十五六年已前迄ハ此書モ甚稀ニテ医人モ心附カズ、故ニ脚氣病ヲ知りタル者ナシ云々”として、以前には脚氣の罹患がきわめて少なかったことを示している。

宝暦13(1763)年の脚氣類方に“脚氣之行也、自レ関以東殊甚矣、蓋感風土之氣、受六氣之疹、者、宛肖江嶺之人乎”とある。江戸時代における脚氣は元禄より享保を経て宝暦に至る頃は江戸に罹患が特に多く、天保年間には発生が少なくなってきたことは、時還読我書に“脚氣ハ至テ少ク、偶々患フル者アリト聞ケバ、篤志ノ生徒ナド執匙ノ医ヘ紹介ヲ乞テ云々”と述べられている。

和田東郭の導水瑣言に“京師六七年前ヨリ急劇ノ病流行シ、人ヲ損フコト少ナカラズ……(中略)……昏悶百苦シテ、ミナ死ス、其迅速ナルコト或三日、或六七日に過ギス、京師ノ俗コレヲ以テ三日坊ト名ツク、……(中略)……全ク脚氣ノ一種ニテ云々”と記され、京都に罹患の甚だしいことを明らかにしている。江戸時代末期においては江戸、京都にとどまらず、五畿七道に蔓延したといわれる。藤井尚久博士は江戸における脚氣の蔓延は吉宗の産米政策と江戸都民の財政の豊かな結果、白米食に起因することを指摘し、地方農民は質朴な生活なため白米食に恵まれなかったことが、脚氣を患う者の少ない理由としている。

## 結 語

江戸時代の文献にあらわれた疾病の顕著なものは、腸患伝染病としての赤痢、腸チフス、コレラで、濾過性病毒としての痘瘡、麻疹がこれに次いでいる。赤痢については寛政年間オランダ医学者によってディセンテリアの名が伝えられている。赤痢流行6回が数えられるが、明らかに地域の記載されているのは江戸、広島にすぎない。腸チフスの流行記録は、延宝2年から慶応3年までに12回あるが、地域名は長崎と名古屋だけである。

わが国におけるコレラの流行は江戸時代に3回を数えそれは世界におけるコレラパンデミー6回のうち、第2回、3回、5回に当る。第1回の流行は文政5年で、わが国の文献では長崎伝來說と朝鮮伝来の二説に分けられるが、疾病の性質、当時の国情、外国文献等より考えてこれは前者の説が正しい。第1回の流行は文政5年鎮西に始まり、東は東海の沼津にまで及ぶが、浪華、芸州が最も甚だしかった。第2回の流行は安政5年で、西は肥前より東は江戸にわたっているが、とくに江戸の流行は悲惨をきわめ、8～9月の55日におけるコレラ死者は26万8057人に及んでいる。第3回の流行に関する記録はきわめて少ない。

痘瘡は古くよりその病氣は知られているが、江戸時代における記録は、西洋医学の伝来によって種痘法の記録が多く、流行は隔絶地に浸透しないこと、また予防、治療にあたって奇神を祀ったことなどがあげられている。麻疹の流行については元和2年より文久2年まで11回を数えるが、京畿、大阪、江戸の地名以外は天下諸国流行等具体的にあげられていない。

以上はその概要に過ぎないが、近世における文献にあらわれた疾病の記録において、疾病そのものの究明が未開拓であるため、その記録の信頼性もきわめて低いことは論を俟たない。しかし、この疾病の記録に関する研究が、わが国における人間の歴史的発展過程ならびに科学の発達過程を明らかにする一助となればこの上ない幸いである。

疾 病 年 表

西暦	年代	疾病流行記事	記 載 文 献
1614	慶長 9	風疾、畿内近畿	紀事野史
1614	元和 2	麻 疹	武江年表
1619	〃 5	痘瘡、疫疾	統皇年代略記
1631	寛永 8	痒 病	享 年 記
1640	〃 17	諸国疫行	統皇年代略記
1642	〃 19	諸国疫疾	分類本朝年代記
1649	慶安 2	麻疹流行	武江年表
1654	承応 3	疱瘡流行	宣順郷記
1671	寛文11	水痘流行	基量郷記
1674	延宝 2	湿疫流行	口訣頭書
1679	〃 7	疱瘡流行	基量郷記
1680	〃 8	対島疾患	本州編年略
1682	天和 2	京都、近畿疾病	年代略記
〃 〃	〃	痘瘡流行	統皇年代略記
1684	貞享元	三日疫病長崎より東都まで	塩 尻
1691	元禄 4	麻疹流行	武江年表
1693	元禄 6	国中時疫	牛山方考
1699	〃 12	古呂利江戸	元正間記
1702	〃 15	対馬疱瘡	本州編年志
1707	寛永 4	咳 嗽	折焚柴の記
1708	〃 5	麻疹流行、疱瘡及痢	武江年表、年代略記
1709	〃 6	痘瘡流行	統皇年代略記
1711	正徳元	〃	塩 尻
1712	〃 2	疱瘡流行	〃
1714	〃 4	疫疾流行	統皇年代略記
1716	享保元	熱ヲ煩フ、江武町	正徳享保間実録
1720	〃 5	痘瘡流行	基長郷記
1723	〃 8	諸国痘瘡流行	統皇年代略記

西暦	年代	疾病流行記事	記載文献
1730	// 15	京畿諸国麻疹流行	久守記
1732	// 17	天下疫癘	武江年表
1733	// 18	//	//
1734	// 19	疫疾流行	統皇年代記
1735	// 20	諸国疫	風也集
1744	延享元	畿内諸国疫疾流行	統皇年代略記
1746	// 3	痘瘡流行	家記
1747	// 4	諸国風邪流行	武江年表
1748	寛延元	水痘	植房郷記
1753	宝暦3	麻疹流行	風也集
1763	// 13	東都大疫	救瘟神曆
1769	明和6	京畿諸国疫	統皇年代略記
1770	// 7	疾疫行	紀事
1772	安永元	諸国疫癘	武江年表
1773	// 2	江戸疫病	//
1776	// 5	京畿風疫流行	年代略記
// //		麻疹流行	武江年表
1779	// 8	風疹流行	時還読我書
1781	天明元	風邪流行	泰平年表
1784	// 4	時疫	武江年表
1788	// 8	京師瘟疫流行	医事雑話
1795	寛政7	感冒	時還読我書
1799	// 11	疫痢流行	成蹟録
1801	享和元	疫邪流行	閑田次筆
1802	// 2	京師傷風	枳園隨筆
1803	// 3	麻疹流行	武江年表
1808	文化5	風邪流行	曲亭雜記
1811	// 8	風邪流行	武江年表
1816	// 13	江戸疫癘	//
1817	// 14	長崎災後傷寒	泰西疫論
1819	文政2	江戸諸国風疾流行	泰平年表
1821	// 4	風邪流行	武江年表
1822	// 5	三日コロリ流行	時還読我書
1824	// 7	麻疹流行	武江年表
1827	文政10	感冒	時還読我書
1829	// 12	痢病流行	一夕話
1830	天保元	時疫	時還読我書
1831	// 2	江戸感冒	//
1832	// 3	風邪流行	武江年表
1835	// 6	江戸風疹	時還読我書
1836	// 7	湿疹	橘黄年譜
// //		江戸麻疹	武江年表
1837	// 8	疫邪	時還読我書
1838	// 9	大阪痘瘡流行	医事雑話
1841	// 12	痢疾	//
1850	嘉永3	風邪流行	武江年表
1851	嘉永4	疫病	武江年表

西暦	年代	疾病流行記事	記載文献
1852	// 5	暑疫流行	橘黄年譜
1854	安政元	江戸瘟疫流行	//
// //		傷寒風邪	武江年表
1857	// 4	風邪	//
1858	// 5	暴瀉流行	橘黄年譜
1859	// 6	暴瀉病	武江年譜
1860	万延元	風邪流行	武江年表
1861	文久元	傷寒, 熱病, 眼病	//
1862	// 2	麻疹流行	橘黄年譜
// //		暴瀉病	//
1863	// 3	//	武江年表
1867	慶応3	風邪熱病	//

## 参 考 文 献

- |   |         |      |
|---|---------|------|
| 日本学士院：日本医学史   | 日本學術振興会 | 1655 |
| 富士川 游：日本医学史   | 裳華房     | 1904 |
| 小川 政修：西洋医学史   | 日新書院    | 1943 |
| 富士川 游：日本疾病史   | 吐鳳堂     | 1912 |
| 経済雑誌社：国史大系  | 経済雑誌社   | 1897 |
| 同：統国史大系   | 同       | 1902 |
| 西村 真琴：日本凶荒史考  | 丸 善     | 1936 |
| 吉川 一郎   |         |      |
| American Geographical Society: Distribution of Cholera. The Geographical Review. 41. No. 2. 1951. |         |      |

A Medical Geographical Study of Diseases in Edo Era

Tomoichi Horiguchi

(Faculty of Education, Ibaraki University)

**Abstract**

Among the most noticeable epidemic diseases recorded in literature of Edo period were Dysentery, Typhoid, Cholera, Variola and Morbilli.

Dysentery was written down as Dysentaria by a Dutch Physician about the years of 'Kansei' and its prevalence was reported six times in Edo and Hiroshima.

Typhoid was pandemic twelve times during the years between the 2nd of 'Empo' (1674) and the 3rd of 'Keio' (1867), but only Nagasaki and Nagoya kept the records of its prevalence.

Cholera broke out three times, in the 5th of 'Bunsei' (1822), in the 5th of 'Ansei' (1858), and in the 2nd of 'Bunroku' (1862). Of the first infection some say that it was imported from Korea, other it invaded in Nagasaki at first, which has been justified.

That was the first infection in our country. It was brought, from Bengal through Java into Japan. Starting from the Kyushu district and reaching to Numazu, the Tokai district, the infection was most furious in the Aki and Naniwa district.

The second spread over the area from Nagasaki to Edo. In Edo it raged most violently and took a toll of 268,057 lives. Of the third prevalence, we are little informed. The prevalence, of Variola, known for long in our country, was put on record 13 times during Edo period, though with the coming into practice of vaccination the epidemic frequency in later times was on the decrease. Morbilli was prevalent 11 times from 1614 to 1862 chiefly in Keiki, Osaka and Edo.

The pandemic regions mentioned in documents of Edo era extend from Chinzei through Keiki to Edo. No mentions are found of them in the Tohoku and Hokuriku district. It may be because the south and west parts of Japan were densely populated and of busy traffic, while so many records would have been left out in the northern parts of a low level of culture.